

森 正樹, 土岐祐一郎 (編)

レジデントのための 消化器外科診療マニュアル

北川雄光

慶應大教授・外科学

本書をまず手に取ったとき、研修医時代に白衣のポケットに入れていた『ワシントンマニュアル』を懐かしく思い出した。手触り、重さ、色合いから想起したのだが、編者である森正樹教授、土岐祐一郎教授の序文を拝読し、編者がこれを意図して見事に実現していることにまず驚かされた。

医療現場最前線の「常識」も年々進化し、年配の指導医にとっては教育している内容が本当に up to date なのか？ エビデンスはあるのか？ ふと不安になることがあるのではないだろうか。日本において消化器外科医は、手術関連の知識・技量はもとより周術期全身管理、集中治療、集学的がん治療、感染症対策など極めて広範な知識・技術が要求される。このすべてにおいて、一人の指導医が最前線の知識をもってレジデントを教育していくことは必ずしも容易でない。本書は、大阪大学大学院消化器外科関連のそうそうたる執筆者らが、その洗練された知識のすべてを投入した珠玉の一冊として編集されている。

このような分担執筆による成書は、往々にしてそれぞれのパートはよく書かれているが、統一性がなく記述

のバランスもばらばらになりやすい。ところが本書では、分担執筆にもかかわらず書式や記載のレベルが統一され、ポイントが明らかにされエッセンスが絞りこまれている。それについて、随所に織り交ぜられた図・表は知識の整理に効果的であり、極めて明瞭に提示されている。おそらく周到な打ち合わせ、綿密な推敲がなされたものと推察される。

さらに、「サイドメモ」は、レジデントが記憶しておくべき事項が魅力的な読み物のような形で頭に入ってくる仕組みになっている。しかも、グレーバックで統一され、私はついサイドメモを拾いながら一気に読み進めてしまった。最近のトピックや自分の専門と離れた分野のエッセンスを知りたい指導医にとっても魅力的なコラムだ。また、本書では各論のみならず総論も大変充実し、レジデント諸君が習得すべき基本概念がしっかりと、しかも簡潔に記述されている。「外科総論」の骨格を若い時代に身につけることは、その後新知見が導入された場合もそれらを的確に吸収するために大いに役に立つはずである。

また、本書は各ページにインデックスが付され、目的の項目に到達し

やすく、手になじむ。読者は使い込むうちに、どのあたりに何が書かれていたかを自然に記憶していくことになるだろう。そうした意味では、iPadに慣れた世代にとってもより使いやすい必携のマニュアルとなっている。救急外来や、外勤当直などさまざまな場面でレジデント諸君の心の支えになることは確実である。

森教授、土岐教授率いる大阪大学大学院消化器外科は、診療、研究、教育すべてにおいて日本のトップを走り、外科医不足の時代にあっても多くの入局希望者が殺到している大教室である。また、関連施設のネットワークを生かして、重要な臨床研究の成果を次々と発信し、多くの優秀な人材を輩出している。永年の伝統と、隆盛を誇る大教室が築き上げたエッセンスが凝縮された本書は、『阪大消化器外科マニュアル』として定番となり、『ワシントンマニュアル』をはるかに凌駕する存在となるものと確信している。

●A5変型/頁480/2012年/定価5,670円
(本体5,400円+税5%)

[ISBN978-4-260-01658-2]

医学書院 刊